

平成26年5月7日

政務活動報告

福島県 大内宿

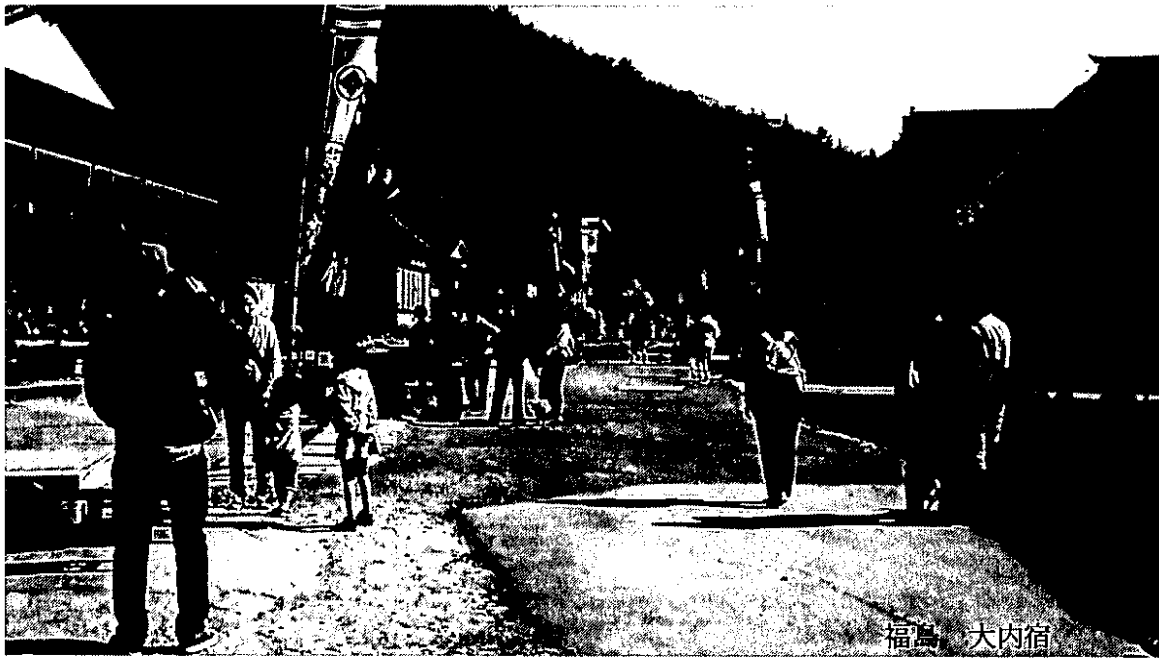
芦塚 典子

大内宿「結の会」

吉村 徳男

大内婦人会長

鈴木 吉子



福島 大内宿

### 伝達のまちで 活躍する女性たち（婦人会）大内宿

大内宿の概要 福島白川の関から延々山道を45km、南会津の山中にある旧宿場町である。

全長450mの往還の両側に、道に妻を向けた寄棟造りの家が建ち並ぶ。

江戸時代には「半農半宿」の脇街道の宿場

旧街道沿いに茅葺民家の街割りが整然と並ぶ

民宿、土産物屋、蕎麦屋

高遠そば（ねぎ蕎麦）が有名

栃のみのお土産

位置情報 福島県南会津郡下郷町大字大内

地理 奥羽山脈山中の、1000級の山々に

囲まれた標高658m前後の地形にある盆地

日本海気候に属し、夏はフェーン現象で暑く

冬は豪雪となる。

寛永20年（1643）頃に開かれ

会津西街道の宿場町

脇街道 会津藩若松城から大内宿を通り

日光街道へと至る

本陣・脇本陣 会津藩の参勤交代や廻米の集散地

として重要な駅となった。

延宝2年（1680）、参勤交代の脇街道を廃止

大内宿を通る参勤交代は途絶えた。

昭和40年代から、外部の研究者が注目、保存活動を始めた。

住民は、保存よりも近代化を望んで、保存地区選定を拒否した。

昭和56年（1981）4月 重要伝統的建造物群保存地区に選定

（1番目：妻籠宿、2番目：奈良井宿）

昭和56年5月14日「施行規則」、同年9月「大内宿保存会」

「大内宿を守る住民憲章」



ねぎ蕎麦ややまめを出す吉村さんの店「茶屋こめや」



役場をやめ、結の会を立ち上げた吉村さん



「結の会」の皆さんによる屋根葺き替え

#### 大内宿を支える「結の会」

毎週水曜日の夜、大内宿の休校校舎に、明かりがともる。

「結の会」のメンバーがそれぞれの仕事を終えた後ここに集合し

先祖代々つたわっている茅葺の練習をしています。

指導者の吉村徳男さん（大内宿 茶屋こめや店主）は、26年間役

場に勤めていました。茅葺職人が年々高齢化していくのを見て、教

育長に危機を訴えましたが、自分でやるより他ないと、役場をやめ

て、茅葺職人に弟子入り。今は「結の会」をつくり、後継者を育て

ています。葺き替えだけでは食べていけないので、自宅「茶屋こめ

や」でねぎ蕎麦と、やまめをいろいろで焼いて提供している。

## 大内宿保存会

大内宿保存会は、昭和56年設立。  
屋根の葺き替えをしてもらうための茅集め →  
大内宿の景観規制、現状変更の審査、巡回指導  
茅刈手伝いの人に昼食や夕食を出さない取り決め  
足場資材、押し切りなど屋根葺き替えに必要な  
備品を揃えての貸し出し

### 大内宿を守る住民憲章

「売らない」「貸さない」「壊さない」

保存優先の原則

### 観光客の推移

2万人（昭和60年）

10万人（昭和62年）

50万人（平成3年） 80万人（平成16年）

90万人（平成18年） 120万人（平成21年）



子安観音堂から見た大内宿の街並み 早朝から観光客がいっぱい

## 伝建のまちで活躍する女性（婦人会）たち

大内宿婦人会長 鈴木吉子さん（38歳）の話

婦人会の集まりは子ども連れで、にぎやかですよ。

もちろん婦人会は、若い人の集まりです。

ほとんどの家が、民宿、みやげや 蕎麦屋食堂を  
営んでいます。そば打ちも女性です。

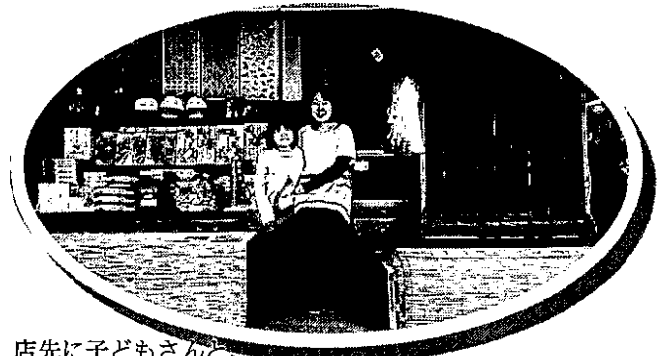
お店はもちろん、女性で販売、飾り、お土産品の  
小物も作ります。忙しく楽しい毎日です。

年中イベント：女性が主役！

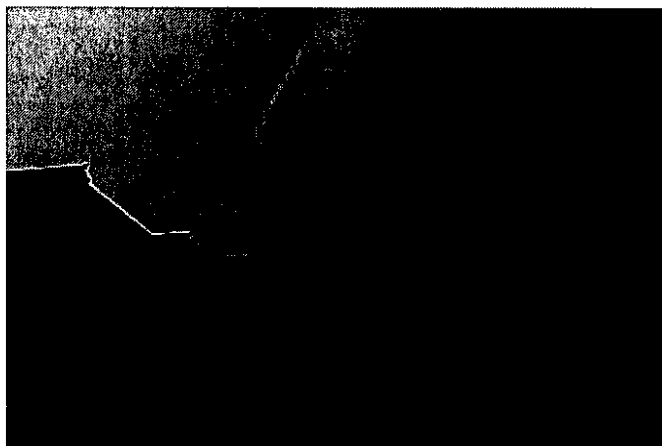
- 1月 正月飾り（婦人会で 正月飾りをします）  
だんご差し（婦人会、老人会と一緒に団子づくり）  
年の神の催し（大晦日の掃除をおえ神飾り）
- 2月 雪まつり（ライトアップされた大内宿もきれい）
- 3月 残雪の大内宿（奥羽山脈の残雪が大内宿の借景）
- 4月 春の花溢れる大内宿（花の咲き乱れる大内宿）
- 5月 こいのぼり飾り（婦人会で飾っています）  
観音様祭り（婦人会メインの楽しいお祭りです）
- 6月 菖蒲彩る大内宿（堀川に菖蒲も手入れします）
- 7月 半夏まつり（高倉神社のお祭り、観光客でにぎ  
あう）弁天様まつり
- 8月 盆踊り・風除け祈願 9月 一斉放水 11月 雪囲い



店先には、観光客用のお土産が並べられている



店先に子どもさんと、塩田津も尋ねてみたいと話す、若い大内宿婦人会長さん



防災の日に防火訓練：一斉放水

From Wikipedia



各家に防火銃



女性（婦人会）の手でこいのぼりが泳ぐ

毎月、婦人会の女性たちが  
イベントを盛り上げ  
店先には女性の手作りの  
小物やお土産品が並ぶ  
福島山中に、  
楽しくお店を切り盛りする  
女性たちの笑顔が  
四季折々咲いている

## 防災活動に大内宿全戸で参加

大内宿は、文化財保護法に基づき昭和56年に重要伝統的建造物群保存地区に選定をうけているが、選定地区の多くの家屋が、可燃性の茅葺屋根の民家が密集しており、火災発生の頻度がかかなり高い状態である。平成3年(1991)度から、各戸に自動火災報知機、屋内消火栓、放水銃等が整備されている。また、消防団、婦人消防隊、大内宿火消組(消防団OB)、下郷町立江川小学校大内分校少年消防クラブなど、各年層で自主防災組織が結成され、それぞれに特有の活動を展開している。

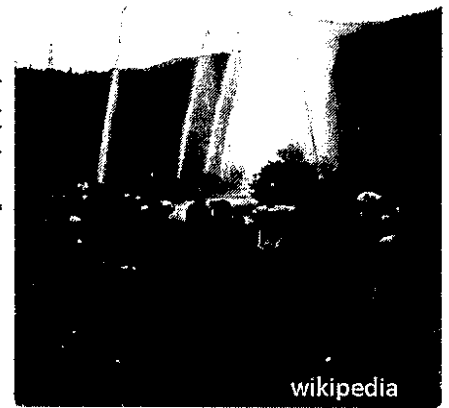
消防団は、火防検査(予防査察)と毎日の放送広報による予防活動のほか実践訓練を実施し、婦人消防隊は消防団と同一歩調での活動を行い、嬉野市と同様、広報活動にも活躍している。大内火消組(消防団OB)は、日中の消防団員不足解消、団員との交歓と「古式腕用ポンプ」使用の放水による広報を実施し、現行の消防団に負けない士気と意欲で活動を行っている。

少年消防クラブは、春休みと夏休みに、拍子木をたたきながら一晩に2回の「夜回り」をする。

夏休みに花火をする日を年1回:8月15日と定めてよく守っている。

平成5年4月1日には「下郷町大内宿防災会」が発足している。各隊単体として独自の活動のほか、世帯全員による春・秋季の年2回各設備の取り扱い説明会や防火講習と救急講習など消防署の協力を得るほか「文化財防災デー」では、一斎放水、防災会の重要な活動として、観光客はじめ地区民から絶大な信頼をえている。

町の一行政区が国の文化財を火災から守るため、  
伝統的に引き継がれた相互扶助の精神から  
「下郷町大内宿防災会」を発足させ、全世帯が  
会員として加入し活動している。



防災の日一斎放水を観光に利用

### 大内宿の歴史といきいきと暮らす女性たちを訪ねて

大内宿下郷町は、人口6,007人 面積31.7km<sup>2</sup>の山奥の町で、町木シラカバ、町花フジ、町鳥ウグイス、何か人情あふれる町の予感がする「大内宿」の響きと、女性が特に婦人会の女性が活躍している町で訪れることにした。東京から白川の関まで約200キロ、「みやこをば かすみとともにたちしかど あきかぜぞふく 白川の関」と能因法師がよんだ「白川の関」に寄り道をして国道289号線にはいる。そこからはひたすら登りこぼりの道を4.3km走る。日光街道にぶつかりその道を121号線に入ると、さらに勾配がきつくなり佐賀県内の道路で例えば、標高1046mの天山の頂上付近をハンドルを切るような山道である。このような山中に伝建保存地区があるのだろうか、不安がりながらさらに舗装された山道を進むと、少し道が広くなり、町営駐車場が見える。この駐車場は400台が収容できるように拡張されているということだが、早朝の7時半にはもう満車になってしまった。

早朝7時半から駐車場は満車、観光客が町中を往来するのである。

この大内宿は、塩田宿と同様、江戸時代宿場町で栄え、近世には急速に衰えていった町で、宿場の衰退で町が取り残されたという構図は塩田宿と変わらない。江戸時代は会津藩の参勤交代の宿場町で会津若松城を出ると、福永宿、関山宿、氷玉宿をとおり大内峠をこえて大内宿に入る。大内宿からは中山峠をこえて倉谷宿に入り、日光街道今市宿にはいり日光街道となる。若松城から江戸へは61里、5泊6日の旅である。若松から5里の距離にある大内宿には、本陣や脇本陣が設置され、会津藩の参勤交代や廻米の集散地として重要な駅であった。延宝8年(1680)、江戸幕府が参勤交代の脇街道通行を厳しく取り締まるようになったため、正保元年(1644)から同年まで21回あった大内宿を通る参勤交代は途絶え白川藩、白川城下町の白川街道にシフトした。次第に大内宿は純粋な宿場町ではなく、「半農半宿」の様相を呈する宿場であった。

## 近代化を望んだ大内宿だが、古い町並みと暮らしを伝承していくまちづくりへ

江戸初期から百年あまりの歴史の推移は、塩田宿の場合と同様な存亡の歴史である。塩田宿もまた長崎街道の宿場町であったが、度重なる洪水で橋が流され、「川止め」になる「塩田道」をさけた武雄周りの「塚崎道」が享保年間に完成すると、街道としての重要性は失われて街道筋の宿場としての重要性は失われて行った。塩田宿の場合は、正徳2年（1712）吉田焼窯元から天草上田陶石への注文が入ると、天草陶石の揚がる港としての役割を担うことになり、塩田津から吉田、波佐見、有田への馬車や大八車が往来し繁栄は続いた。

明治元年：慶応4年（1868）の会津戦争では大内村も戦場となったが、宿場は戦禍を逃れた。明治32年（1899）日本鉄道と接続する上越西線が開通すると、会津と関東との物流は南会津を通らなくなり、大内宿の宿場町としての地位は完全に失われた。

昭和40年代から外部の研究者が大内の生活調査や建築物調査などで盛んに訪れるようになると、大内の宿場の町並みが再評価され、外部の研究者が保存活動を始めた。この時一部のマスメディアが、「大内は貧乏であるから茅葺屋根の家に住んでいる」と報道したため、住民は茅葺屋根の家に住むのをためらうようになり、住民による保存活動は盛り上がらなかった。また住民は農業から2次・3次産業へと転換する暮らしを望み、生活の近代化を望んで、旧街道は舗装され、茅葺屋根はトタン屋根に葺き替えたり、家屋の増改築をするようになった。

昭和56年（1981）4月18日、重要伝統的建造物群保存地区に選定され、旧宿場としては妻籠宿、奈良井宿に次いで3番目の選定である。同年8月「大内宿保存会」が設立されて住民による町並み保存活動が始まり「大内宿を守る住民憲章」も制定された。

平成10年「大内宿結の会」が結成され、住民による茅葺屋根の復元や葺き替え技術の伝承が開始された。

観光客数は、昭和60年に約2万人であったが、バブル景気が始まると急増し、平成2年に会津鉄道が開通すると、翌年には50万人を突破した。平成9年、盤越自動車道が全面開通すると60万人を超えた。平成16年には、80万人を超え、平成18年には90万人、平成19年には100万人を突破した。平成21年には、「大内宿周辺地域渋滞対策協議会」が設置された。現在は年間、120万人の観光客が訪れる。

渋滞対策も十分にとられて、ホームページや広報で十分な説明が行われているにも関わらず、駐車場は早朝から満車、帰りの会津若松まで至る121号線は、山道8キロの延々と続く渋滞で、この車の列は大内宿まで今日のうちに着くことができるのであろうかという心配をしながら大内宿を後にした。

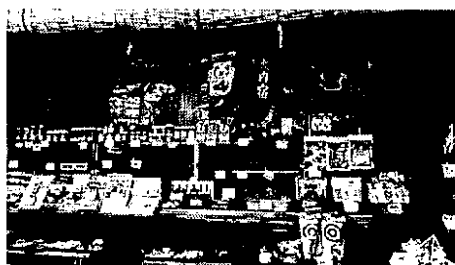
### 30代の婦人会長、民宿を営み、お店の小物を作り、ねぎ蕎麦の店を切り盛りし、あるいはそばを打ち 婦人会合には女性たちが子どもと一緒に集い、明るく、笑顔でいきいきと生きている大内宿の女性たち

大内宿の繁栄は女性にあるのではと、婦人会長にコンタクトを取りお会いしたが、初対面でずいぶん驚かされてしまった。彼女は年齢38歳の小学生と大学生の子どもをもつ若いお母さん。民宿を営み、店先に並べる可愛い小物をつくり、毎月の婦人会の会合には、ほとんどの女性が子供連れで参加し、楽しい時間ですと話す。彼女のそばにいた可愛い小学生も、学校を出たら帰ってきてお母さんのお仕事を継ぐということ、また学生の息子さんも卒業したら大内に帰ってくるという話を嬉しそうに話してくれました。

毎月開催されているイベントには、もちろん高倉神社の半夏まつりや防火訓練を兼ねた一斉放水などがあるが、大内雪まつりでは、豚汁や甘酒のふるまい、宿場に軒並み並ぶ蕎麦屋では、女性がそばを打っている光景もあり、「ねぎ蕎麦」は余りにも有名で、観音堂まつりに至っては、女性だけのお祭りで、子どもも一緒に観音堂で楽しくふるまい一日を過ごす行事です。仕事がすべて観光客のおもてなしに繋がりと、大内宿の全員が、伝統とおもてなしの心を活かした、まちづくりに活力と生きがいをもって、いきいきと生活を楽しんでいる。

塩田津は、平成17年12月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されて10年になる。家屋の修理・修景は進んでいるが、伝建家屋が十分に活かされていない。重伝建地区は、昔を懐古し心のふるさと癒しの町並みである。貴重な資源である。塩田津独自の活用ができる町並みである。

婦人会長さん手作りのお土産グッズ



大内名物 ねぎ蕎麦

